広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|---|---|
| Title | Mussetの《Les Nuits》について |
| Author(s) | 政広, 洋子 |
| Citation | フランス文学 , 6・7 : 56 - 65 |
| Issue Date | 1965-07-30 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040867 |
| Right | |
| Relation | |

# Musset の ≪Les Nuits≫ について

政　広　洋　子

「夜」の詩人とさえいわれている Alfred de Musset の偉大な詩，一連の「夜」Les Nuits——La Nuit de Mai, La Nuit de Décembre, La Nuit d'Août, La Nuit d'Octobre——をとりあげてみたい．

まず，この一連の「夜」の霊感となったものは何であったか，簡単に記しておこう．それは，すでによく知られている George Sand との愛の破滅を述べることになるのであるが．

お互に不滅の過去という幻影に悩まされ，戦い，一緒にいることの不可能とその必要とにさいなまれて憔悴しきり，不滅の過去をなきものに，したがって相手の存在をなきものにしようという想いに悩まされた Musset と George Sand にとって理性の教えるたった一つの救いは，どちらか一方が突然，しかもひそかに逃げ去る勇気を持つことであった．この勇気を George Sand が持った．1835年3月6日，George Sand は Nohantにむっかて発った．George Sand は病から治っていき，他のもっと健康的な恋愛を求めていった．Musset は治ろうと試みた．彼は手紙の中や作品の中や話題の中で，George Sand の思い出を無頓着に，あるいは面白く思い出すように努めた．時々よみがえってくるこうした宿命的な苦悩をもつ愛，そしてそうした愛による聖なる傷，人にはわからない傷口を彼はいつもみつめていたのである．

こうして Sand との恋愛の危機を経たのちの Musset は，Thibaudet が《四羽の壮麗な白鳥 les quatre cygnes sublimes*1》とよんだ四編からなる一連の「夜」の詩を中核として，偉大な抒情詩を書くことになるのである．George Sand の姿やあるいは彼女を通して他のかっての恋人の姿が，突然嫉妬を，怒りを，怨みを伴ってよみがえってくる想いと，もっと奥深い魂が詩人に語りかける深い真実さと崇高さとに満ちている一連の「夜」において，私は，Musset がロマン派四大詩人のうちで，最っとも詩人らしい詩人といわれる理由を見い出すことができるように思える．

始めに，《les Nuits》を書くことが，詩人にとってどんな意義をもっていたか，いいかえれば，何故，詩人はそれらを書かなくてはならなかったか，結論的に述べておこう．

1835年の《La Nuit de Mai》から1837年の《La Nuit d'Octobre》までの一群の抒情詩は苦悩や思い出の相続く段階がみられる傾向は，確かにあるけれども，恋の嘆き，悔恨，あるいは希望，あるいは涙によって構成されたり，感情的な変化を書いているのではなく，愛は全体としてわずかな部分しかしめていず，しかも知的，精神的な問題の要素としてしかかわっていないのである．すなわち詩の創作，ということについての感情的な苦悩なのである．すなわち，《苦悩している詩人は詩人として生き残りうるであろうか．もしそうであるならば，何が彼

の詩想 Poésie であるべきであろうか》*2 という問題を持った詩人ののっぴきならぬ問いであり，必死な答えなのである．

《La Nuit de Mai》を書くにあたって詩人は次のように言っている．《…いまだに私を盲目にしている思い出を追い払い，再び思い出そうとする習慣を破るのに，この上ない努力をいたしました．苦痛がもはや答えることができない点にまで苦痛に聞いてみたあと，私の涙を飲み干し，味わったあと…ついには，苦痛よりも，もっと強く自分を自覚するようになり，過去のすべてから身をひくようになった…》*3 そして，Musset は《魂の中に出すことを要求する何かがあるように》思えてきたのだった．

《La Nuit de Mai》において，詩人は対話の形で書いている．詩の女神 Muse と彼とが二人の対話者である．すなわち霊感である詩の女神 Muse は，詩人がうたうことを，仕事をすることを望み，愛のうらぎりによって引き裂かれた心，絶望は，ただ沈黙を求めている．ここで注目したいのは，彼の対話者である Muse，すなわち彼の中に湧き起ってくる霊感は，姿も性質も冷淡でなく，母であり姉であり恋人であるやさしく抱擁力のある女性のようである．だから多くの詩人達のように霊感という生命なくして，ものの本質，抽象，象徴を祈願した，そのような冷たい神聖さを持っていないのである．春の夜の中に Muse がいると，自然は匂いと愛とやさしさとに満たされ，詩作をやさしい色合で色どるのである．したがって詩的霊感と詩人の感情という相反する欲求を持つ存在の間を，詩人は衝撃することなく，私達にやさしい余韻を残しながら通っていくのである．自然のみずみずしさと，生々しい情熱と奥深い苦痛とが，これら一連の「夜」のように巧みに結合しているものは，他にどこにもないといわれている．そして詩想 poésieを，清らかな精神をもった慰め人 Muse は，ほとんど崇拝をもって，愛情をもって扱っている．《La Nuit d'Octobre》においても，雄々しくも痛ましい諧調の中で尽きることのないような詩情の流出と霊感とが，激しく，しかも露骨な情熱の表現としてほとばしりでるのである．そして一方で，詩人の深い苦悩とまだ生々しい印象，他方で，霊感によって目覚め偉大になろうとする鋭い魂との混合，結合の中で，この上ない魅力を私達にあたえるのである．

古典主義作家も苦痛によって偉大になった．苦痛は彼らの詩においてうたわれているが，彼ら自身のものでない場合でさえ深さと communicative としかも力強さとを与えたのである．

Lamartine の初期の詩は，非常にありふれている．ところで彼の愛する女性 Julie が死ぬと，苦痛が彼に自分自身の姿をみつめさせ，彼は《Premières Méditations》を書くのである．Musset はそれに気づいた．Lamartine が情熱と苦悩のただ中で，天の気高さという感覚や不滅の観念が彼の中に目覚めたと．すなわち“苦悩という天使”が彼に話しかけ，心の悲しさの中で霊感を見い出した，と．だから Musset はのちに，Lamartine に手紙を書いたのである．(Lattre à M. de Lamartine)

Victor Hugo は，悲痛でしかも崇高な詩を父のような苦痛だといった．Alfred de Vignyのように，物に動じないことを目標にした詩人達でさえ，影響力大なる苦悩，それらの謹厳さ，堅忍とを受けなければな

らなかったのである．苦痛が詩の唯一の源泉であるとまでいわなくとも，激しく感じた苦痛は感受性を鋭敏にし，詩人に才能を現わし，あるいは詩人をきたえ，又苦痛の悲痛なる真実さに導き，苦痛は，本当に純粋なる傑作を作り出すのである．

Musset のうちに湧きおこった霊感は，それを感じて，絶望によって黙している詩人の無為を責め，詩作するようにいう．Muse は慰める女性としてやってきて，詩人が失ったものは，《une ombre de plaisir 空しい快楽》，《un semblant de bonheur いつわりの幸福》であるといい，詩人をひきつけうるあらゆることを数えあげる．哀調を帯びた穏やかさから，突然，Muse は激しくせまるのである．

Prends ton luth! Prends ton luth!
Je ne veux plus me taire!
竪琴を取りなさい！竪琴を取りなさい！
もう私は黙ってはいられません．
(小松清訳)

苦痛によって変ぼうし，霊感に満たされている Muse の激しい呼びかけにもかかわらず，

Je ne chante ni l'espérance,
Ni la gloire, ni le bonheur,
Hélas! pas même la souffrance.
La bouche garde le silence
Pour écouter parler le œeur.
希望も，光栄も，幸福も
わたしは願いません．
ああ！苦痛さえも願いません．
口は沈黙を守り，
心が語るのを聞きます．(小松清訳)

という詩人の応答は，非常に簡潔であり，包み隠された悲しみと，苦しみにつかれきったような悲しみがある．

しかし，Muse はもっときびしい調子で呼びかけ，義務としての言葉を詩人に話すのである．

L'herbe que je voulais arracher de ce lieu,
C'est ton oisiveté; ta douleur est à Dieu.
Quel que soit le souci que ta jeunesse endure,
Laisse-la s'élargir, cette sainte blessure
Que les noirs séraphins t'ont faite au fond du cœur;
Rien de nous rend si grands qu'une grande douleur.
Mais, pour en être atteint, ne crois pas, ô poète,
Que ta voix ici-bas doive rester muette.
Les plus désespérés sont les chants les plus beaux,
Et j'en sais d'immortels qui sont de purs sanglots.
わたしがここから引き抜こうと思う草は，
あなたの無為なのです，あなたの苦痛は神のものです．
どんな愁いをあなたの青春が堪えなければならないとしても
それをひろげなさい，黒い熾天使が
あなたの胸の奥に作ったその聖なる傷を．
偉大な苦痛ほどわたしたちを偉大にするものはありません．
その傷に傷つけられたからといって，

おお詩人よ，
あなたの声が下界で沈黙しなければならないと思ってはいけません．
こよなき美しい歌こそこよなき絶望の歌です．
ひたむきのすすり泣きである不滅の歌をわたしは知っています．

(小松清訳)

さらに詩の女神 Muse は，よりよく詩人を説き伏せるために，詩人にペリカンの美しい伝説を思い出させている．ペリカンは海を探したが無駄で，子供達の食物として，自分の心臓以外何一つ持って帰ることはできなかった．食物をさがしての長い旅につかれ，帰ってきたペリカンに飢えた子供達が彼をとりまく．犠牲を覚悟して，ペリカンはきりたった岩の上によじのぼる．子供達に彼の心臓を分けてやり，血のしたたるのをみて，崇高な愛にひたり，彼はその苦痛をなだめるのである．そして快楽と愛情と恐怖に酔って死の宴の上によろめき倒れる．

Muse は，自分の血で子供達を養うペリカンは，普通の食物を持って帰ったよりもっと偉大である，と暗にいっている．そして，これは，詩人が苦痛な心を自由な身にするということでしか偉大でありえない詩人の姿であり，苦痛がペリカンを崇高にしたように，苦痛は，詩人を天才にするのである，と．子供達の運命が，ペリカンの血によってなされるように，そのように詩は，魂の知的食物である詩人の苦悩から作られるのであると，ペリカンの伝説で象徴しているのである．

崇高さと感銘的な象徴とをもったこうした Muse の雄弁にもかかわらず，まだ傷ついている詩人の心は答える．

Mais j'ai souffert un dur martyre,
Et le moins que j'en pourrais dire,
Si je l'essayais sur ma lyre,
La briserait comme un roseau.

しかしわたしは辛い苦難を受けました．
そしてどんなにわずかにそれを語っても，
もし竪琴にあわせて語ろうとすれば，
竪琴は葦のように折れるでしょう．

(小松清訳)

同じように短い応答で，優美な憂愁をもって，詩人は最後までうたうことを拒絶しているのである．

以上のように《La Nuit de Mai》において，詩人は自己の不幸を，苦痛を語ることはできなかった．すなわち，苦悩を語ることによって，苦悩をはっきりさせ，苦悩に表現を与え，苦悩を限定することのできる程，彼の苦悩は鎮静してはいなかったのである．しかし，George Sand との最後の破滅による激しい苦悩，それに続く三カ月余りの沈黙の後，その苦悩は，詩人に自己をみつめさせ，自己の悲しみから孤立させ，一種の官能のようなもので，自分の苦しい物思いに満足させ，苦悩を和らげるというすばらしい霊感を与えることができたのである．

しかし，詩人が愛することと苦しむこととの目に見えぬあらゆる力を自覚し，苦悩によってもっと偉大に，高貴になった魂を感じるようになるのは，《La Nuit de Mai》を書いた時から二年四カ月という時間が必要であった．すなわち，《La Nuit d'Octobre》は，《La Nuit de Mai》に必要な続篇であり，大なる苦悩の最後の言葉で

あり，嫉妬の怒り，復讐のもっとも正当でもっとも堪えがたいもの《許し pardon》で構成されている．たとえ《La Nuit d'Octobre》の中で，詩人が恋人の裏切りを再び呼びおこしているとしても，それは《Jours de travail! seuls jours où j'ai vécu!》(労作の日々よ！生きた唯一の日々よ！）と呼ばれた後であるし，後の《vieux cabinet d'étude》(古い勉強部屋）をよびおこしたのちである．《La Nuit de Mai》において詩人の傷ついた心に，

Rien de nous rend si grands qu'une grande douleur.

偉大な苦痛ほど私達を偉大にするものはありません．

といい傷ついた心が mélancolie に鎖され黙しているのをとがめた．しかし《La Nuit d'Octobre》では，もっと詩人の魂を偉大にしている．

Est-ce donc sans motif qu'agit la Providence,
Et crois-tu donc distrait le Dieu qui t'a frappé?
……
L'homme est un apprenti, la douleur est son maître,
Et nul ne se connaît tant qu'il n'a pas souffert.
C'est une dure loi, mais une loi suprême,
Vieille comme le monde et la fatalité,
Qu'il nous faut du malheur recevoir le baptême,
Et qu'à ce triste prix tout doit être acheté.
Les moissons pour mûrir ont besoin de rosée;
Pour vivre et pour sentir l'homme a besoin des pleurs;

それでは故もなく摂理は動くのでしょうか？
そして，あてもなく神はあなたを打ったと思うのですか？
……
人間は徒弟です，苦痛は師匠です．
そして何人も苦しんでこそ自分を知るのです．
わたしたちは不幸の洗礼を受けなければならず，
その悲しい犠牲によってすべてがあがなわれる．
これは厳しい法則です，
世界や運命と同じに古い至高の法則です．
麦が熟れるためには露が必要です，
生きて感ずるためには人間には涙が必要です，　(小松清訳)

すなわち，愛とならんで，しかも愛によって，苦悩はまずむなしい責苦としてはねつけられていたが，ついに苦悩は作物をみのらす雨として受けられている．苦痛は盲目で意地の悪い神によって詩人に与えられたのではない．先見の明があり，同情ある神聖さによって与えられたのである．要するに苦痛だけが子供を一人の男にしうるのである．しかも苦痛がもたらすもの，それは，とりわけ享楽する新しい能力であるというのである．神秘なる同化によって，心は楽しみをもっと変った風に，もっと強さをもって楽しむことができるようになるというのである．

ここにおいて，詩人はやっと彼の心を常にとらえている問題，苦しんでいる詩人の詩的創作という問題意識に解決を得たようである．1835年の《La Nuit de Mai》から1837年の《La Nuit d'Octobre》までのこうした一つの理念のもとで Musset は，さらに，1835年《La Nuit de Décembre》，1836年《Lettre à M. de Lamartine》，1836年《La Nuit d'Août》を書いている．ついでに，一貫した彼の理念という観点からこれらを考察すると，《La Nuit de Décembre》は，詩人と詩人の分身との対話であり，見捨てられた青年の怨みであり，虚栄の言葉であり，許すことを知らない女性にむけられた非難の言葉であるが，《La Nuit d'Août》は，詩人の怠惰という主題で Muse の嘆きによって構成されている．《Rien ne réveille plus votre lyre muette. 何ものもあなたの沈黙している竪琴を覚さない》と Muse は詩人に言う．そして Muse は詩人が常に新しい aventure に霊感をさがすととがめている．そして，たとえ，詩人が Muse に，そうしたあらゆることは，ちっとも重要なことではない．まず生きなくてはならない，すなわち《aimé sans cesse après avoir aimé. 愛したあとで絶えず愛さなくてはならない》と答えたとしてもこの愛の讃歌の中には，過去の苦悩も，愛され，失われた女性にささげられる詩的にまとまったどんな断片もないのである．

《Lettre à M. de Lamartine》は前述したように，Lamartine が Musset と同様に苦悩の中で霊感を見出した "Chantre de la souffrance 苦悩の歌い手" であり，《Lac》の著者に感謝して数行の詩を送りたいという欲望をおこさせたからである．それは賞讃と同時に共感の大胆なる表明なのである．

以上，私は一連の「夜」を通して Musset の苦悩と彼の一貫した理念とをみてきた．そして，最後に私は，Lamartine, Alfred de Vigny, Victor Hugo を含めたロマン派四大詩人のうちで Musset がもっとも詩人らしい詩人といわれる理由を理解したいと思う．先に，私は Lamartine が Musset と同様，Chantre de la souffrance であるといったが，しかし，失った恋から霊感を得たという点においてのみ共通しているのであって，彼ら二人の苦悩，したがって詩的霊感も本質的に異っているのである．閑静な美しい田園 Milly の村荘で，母の深い愛情の中ですごした Lamartine は，古代の人々特にローマ人のもつ分別や理屈は嫌いだったし，フランス古典派の作家達のもつ現実味もはだにあわなかったし，La Fontaine の書いた人生や人間のあまりに醜い姿もきらった．彼は山野の逍遙を好み，夢想した．聖書の中の田園の叙景を読み興奮し，Bernardin de Saint-Pierre の《Paul et Virgine》や Chateaubriand の《Atala》《René》を読んで感動した．このように，あらゆる物事を美しくみてあらゆるもののために涙を流すような熱狂的な人々や，心の優しい人々，無分別な人々や悲哀にかきくれる人々を好んだ彼は，確かに天成の抒情詩人として並ぶものはないといえるかも知れない．自然の美，恋愛の情，死の幽玄，無限に対する感情など，優しい高雅な魂をうたう．しかし，思想は深遠とはいえず，ただ漠然たる憧憬と深い絶望を私達に示すだけであり，詩人自身も commentaire で述べているように，魂の溜息

であるにすぎない.

しかし，生まれながらにして，極端な感受性をさずけられた Musset は，幼い頃からあらゆる本を読み，人間を知り，自己を追求し，あらゆるものに矛盾を感じ，懐疑を知り，そうしたあらゆる混乱に身を投じてきた彼は，Lamartine のように印象を巧みに受けとり穏やかな憂愁で満足していることはできなかった. Musset においては，霊感がほとばしりでるのは，うちからであり，自然に色をつけるのは彼の情熱であり，自然をかぐわしいものにするのは，彼の息なのである. そして，何よりも，世紀児 enfant du siècle として，彼は，彼の心理的洞察の才能をもって，苦悩そのものに対立し，あくまでも芸術的見地から描いているのである.

確かに風声水色すべてが詩人の悲愁をわかち伝えているように思われる Lamartine の詩は，より抒情的であろう. あわただしく逝った愛人 Julie への哀惜と孤独感は，自然の流露感，真情の吐露において，より美しくより詩的に感じられるであろう.

Que me font ces vallons, ces palais, ces chaumières,
Vains objets dont pour moi le charme est envolé?
Fleuves, rochers, forêts, solitudes si chères,
Un seul être vous manque, et tout est dépeuplé!

L'lsolement

あの谷も，あの宮殿も，藁屋も，今は甲斐ない.
私には魅力の失せたむなしい殻だ.
河，巌，森，親しい孤独よ，
一人のひとがいなければみなさみしい.

秋山晴夫訳

こうした優しくも憂愁な吐露は，よりロマン的な感情であり，私達にとっても親しい感情である. Lamartine の詩の方が，より抒情的で万人むきであろうが，Musset の詩には，Musset 独特の感能と感覚との結合という意味において，あるいは，より現代的であり，そうした芸術的感覚をもつ者にでなくては，理解できないような Musset の魂が感じられるのではないだろうか. こういう点において，彼の詩の意義もあり，価値もあるように思える.

次に Hugo は，ロマン派の統率者として高く評価されている. それは，彼が豊かな生産力と不断の創作力とを持ち，扱ったテーマの豊かさという点，又彼の非常に強い自尊心や自己の才能を他人に敬服させる手腕は，彼を総師として認めさすには十分であった. とりわけ彼がいつまでも読者を失うことのないのは，《Les Feuilles d'Automne》にみられるように，清澄平穏な詩，家族と家庭と私生活の詩，魂の内部の詩[*4]" などきわめて大衆的なものを豊麗な詩藻に託して自己の喜憂をうたいあげているところに，大衆の共感をえているのであろう. 非常におだやかな感動をもって，あふれんばかりのまごころをもって，深い愛情をこめて，詩人は子供達のことを語る.

Lorsque l'enfant paraît, le cercle de famille
Applaudit à grands cris. Son doux regard qui brille

Fait briller tous les yeux
Et les plus tristes fronts, les plus souillés peut-être,
Se dérident soudain à voir l'enfant paraître,
Innocent et joyeux.
子供がやってくると家のまどいは
やんやとはやす．子供のあどけない瞳は輝いて
みんなの目を輝かす
世にも悲しく罪によごれた顔さえも
すぐにほころびる，子供が無心に朗らかに
やってくるのを目にすると．
(辻昶訳)

しかし，Musset は，詩人，文学者を対称とする人間対自己という境地に立って，すなわち，いつでも女性によって苦悩したとはいえ，しかし，その苦悩は，もはや女性に対する以上に，自己，詩人としての対決という立場で，芸術的専心に苦悩するのである．

最後に Vigny は，周知の如く哲学詩人として，フランスの全ロマン派詩人のうちでも存在を異にしている．すなわち，彼は，他の詩人達のような情熱に自らをゆだねることなく，どこまでも意識にかけて，人生の沈痛な諦観を掘りさげようとしている．Hugo も Lamartine も Musset も，かって幸福であった時の自然に再びやってきて，幸福をよみがえらそうとした．しかし自然は変ぼうしてしまっている．Hugo はそれを自然の不誠実のように悲しんだ．しかし，悔恨とほとんど絶望のあと，自然は変化しても我々の思い出の中では不動のままとどまっている，という考えによって慰められ，

Et bien! oublions-nous
Ceux que vous oubliez ne vous oublieront pas.
Tristesse d'Olympio
さあ，我々を忘れてくれ……
お前達に忘れられるものは，お前達を忘れはしない．

といった．Lamartine は逆に，恋人達にとって魅惑的であった風景を，その思い出をそのまま守ってくれるように自然に懇願するのである．一方，Musset はかって幸福だった場所，Fontainebleau の森を前にして，悲歎さも祈りも発っしはしない．彼は，時間がすべてを持ち去りはしない，思い出の奇跡は過去と現在を共存させることであるといい，Dante が Enfer の第5の歌において，次のようにいっているのをとがめている．

…… il n'est pire misère
Qu'un souvenir heureux dans les jours de douleur,
Souvenir
悲しき日に幸ありし日を思うより
悲しきはなし，　小松清訳

彼にとって破滅しうる幸福は，快い虚偽でしかなかった．したがって思い出は，不滅の慰めなのである．

しかし，Vigny にとって，自然は苦悩を分ってくれるものでもなければ，慰めてくれるものでもない．自然は冷然としてその前にうごめき，短い命を楽しんでいるものとして，人間を見下しているものなのである．詩人は，残酷で冷然たる自然から遠ざかって，死滅すべきものにのみ執着するであろう*5．女性は常にあざむき敵となり*6，

神もわが子を捨てはしなかったであろうか．神の示す永遠の沈黙に対して，正しい人は，侮蔑と沈黙とを差し向けるであろう.*7 Vigny はここにいたって次のように言う．

Gémir, pleurer, prier, est également lâche.
Fais énergiquement ta longue et lourde tâche
Dans la voie où le sort a voulu, t'appeler,
Puis, après, comme moi, souffre et meurs sans parler.

La Mort du Loup

嘆き，泣き，祈ることは等しく卑怯．
運命に招き入れられた道の中で，
長くて重い自分のつとめを力強く果すがよい．
それから，私と同じように，苦しんで黙って死ぬのだ．　(平岡昇訳)

諦観，運命を前にして，追いつめられた狼を手本にして黙々と苦しんで死んでゆくべきであると毅然たる stoïsme の心境に到達するのである．このように Vigny は孤独と孤独感に伴う苦い悲嘆とを Chateaubriand のように夢想の中に逃避する手段を持たず，知性でもって，自己へと，自分の哲学をつくりあげていくのである．

このように Vigny の詩が，哲学的精神から生まれてきたのに対し，Musset の詩は，芸術的精神，いや精神というよりむしろ魂から生まれたものであって，これら二つの間には，本質的に異るものがあるのである．

このように，一連の「夜」の詩人 Musset は，一種の天才的芸術家の感覚を持ち，劇作《Lorenzaccio》や《On ne badine pas avec l'amour》にみられるように，自己を嘲笑，冷笑しても，なお，自己であらねばならぬ，やりきれぬ切ない苦痛を持った dilettante であった．こうした dilettante としての姿も，一連の「夜」の詩人であるからこそ理解できるのである．

世紀児として，小説《La Confession d'un enfant du siècle》を書き，彼独自の感覚，洞察の才能でもって，もっとも絶望的な恋の作者として，人間の心の目撃者として，ロマン派を代表する偉大な詩人であるが，それ以上にもう一歩深めている点は，ロマン派詩人中，もっとも古典的な詩人としての位置をしめしているのである．ロマン派詩人であり，ロマン派の幻想趣味にはあきたらず，それに少しも加わらず，古典派の名優 Rachel 嬢のために書きながら，クラシック的なものをつぶさにみつめる心をもっている，そうしたところに彼独自の資質，偉大さがあるように思える．

一連の「夜」をさらに，つぶさにみると，そこには，絶望的な恋の歌，という面，ロマンティックなものもあるけれども，同時に，その中に Racine 的な古典に通じるもの，心の純粋性もあり，この点においても Les Nuits を高く評価したい．

ついでながら，Musset の影響が surréaliste 達にもおよぼされていることをつけ加えておきたい．surréaliste 達が，自分達の神々の座の一つに据えた Comte de Lautréamont は，いわゆる《呪われた詩人》といわれる血族の特異な一人であるが，彼の著作《Les chants de Maldoror》の中に，Musset の影響をみることができる．たとえ彼が Musset について，《知性のシ

ャツをまとわぬキザ男》*8 と酷評しているとしても，彼は Musset のものをよく読み，尊敬もしていたようである．彼の第一の歌の中にあるペリカンの描写は，確かに，Musset が《La Nuit de Mai》で描いたペリカンの伝説を思い浮べ，しかも《呪われた詩人》として思い浮べているようである．

このように，Musset の特異な心理分析の才，それによる芸術的資質は，いつの時代でも尊い読著を失うことはないであろう．

## Notes

*1 Albert Thibaudet : 《Histoire de la littérature française》
*2 Philippe van Tieghem : 《L'homme et l'œuvre》 p. 113
*3 Paul de Musset : 《Biographie d'Alfred de Musset》 p. 136
*4 Les Feuilles d'Automne の序文
*5 La maison du Berger
*6 La Colère de Samson
*7 Le Mont des Oliviers
*8 「詩学断想——未来の書のための序文」

## 主 な 参 考 文 献

Sainte-Beuve : 《Causeries du lundi》 I, XIII
Emile Faguet : 《Dix-Neuvième Siècle》
Albert Thibaudet : 《Histoire de la littérature française》
Philippe van Tieghem : 《L'homme et l'œuvre》
Paul de Musset : 《Biograhie de Alfred de Musset》
Lanson, Tuffrau : Manuel illustré d'Histoire de la Littérature Française
Maurice Allan : 《Alfred de Musset》
Comte de Lautréamont : 《Les chants de Maldoror》
P. Gastinel: 《Le romantisme de Musset》